

幼 兒 の 教 育

昭 和 十 一 年 七 月

七 月

都會の子ぎもに氣の毒な夏が來た。田舎の子ぎもが、あゝもふんだんに楽しんでゐる緑の野も、清い小川の流れも、遠くわざ／＼連れて出て貰はなければ見るこゝさへ出來ない。蟬さり、蜻蛉つり、小魚がり、目高すくひ。子ぎものために與へられてゐるやうな夏の戸外の遊びも、電車と自動車の町に求められやうもない。アスファルトに熱せられ、コンクリートに蒸されて、自然の香りと爽かさを全く失つてゐる風が、魔ものゝ吐くいきでゞもあるやうに、子ぎもらの顔を、ねつきりゝ氣味わるく撫でる。

その一劃を仕切つて、特に子ぎものための園としてゐる都會の幼稚園である。先づ何よりも取り入れたいものは田舎の夏の自然味だ。春よりも、秋よりも、冬よりも、一層の苦心が夏の都會の幼稚園にあるのも、この氣の毒さから、せめて少しでも、子ぎもを救つてやりたいと思へばこそに外ならない。